



## 月のうさぎに教えられたこと

～誰一人とり残されることも犠牲になることもない社会へ～

皆さん明けましておめでとうございます。輝かしい新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。今年もご一緒に、楽しく人生を豊かにする学びを重ねて参りましょう。



今年の干支は十干が癸（みずのと）、十二支が卯（うさぎ）の癸卯です。うさぎは穏やかで温厚なところから「家内安全」、また跳びはねる姿から景気が上向き、回復すると期待される象徴だそうです。60年前の癸卯の年は昭和38年でした。

この年には、ダラスでのケネディ大統領の銃撃事件や吉展ちゃん誘拐事件など心痛むニュースもありましたが、梓みちよさんの「こんにちは赤ちゃん」がレコード大賞を獲得、翌年の東京オリンピックを祝う三波春夫さんの「東京五輪音頭」が街中に流れるなど、高度成長期の元気な時代でした。令和になって5年が過ぎ、新型コロナウイルス感染の暗雲がようやく晴れようとしています。今年が爽やかな一年でありますことを皆さんと共に願いたいと思います。

“うさぎ”について今昔物語集の巻五第十三話で語られた説話をご存知でしょうか。月にどうして“うさぎ”がいるのかその理由を語っています。その話は「ジャータカ物語」（釈迦の前世物語）にも記されています。天竺に兎と狐と猿がいました。三獣は共に誠の心を発して仏になろうと菩薩行に励んでいました。三獣の前に空腹でやつれた老人が現れました。何とかしなければと猿は山に入り木の実を集め、狐は川で魚を取り、老人の前に持ってきました。しかし、兎は何も見つけることができません。手ぶらでうなだれています。老人も猿も狐も、兎をなじりました。兎は猿には柴を集めてきてくれ、狐には柴に火を付けてくれと頼みます。そして自分は、わが身をその燃え盛る火中に投じ、老人の空腹を癒す供物となったのです。その老人は、帝釈天の化身でした。帝釈天は兎が自らの命を投げ出した捨て身の慈悲行に感動し、兎を月に移して、それ以降、みんなにその姿を見せるようにしたというお話です。

「慈悲」とは、他の生命に対して楽を与え、苦を取り除くこと（抜苦与楽）を望む心の働きだそうです。兎がとった“捨身”の行動は、ともすれば“保身”ばかりに走る今の世の中の風潮への戒めでもあります。でも、それと同時に兎にわが身を焼くことを選択させたことに何とも言えない違和感を抱いてしまいます。自己犠牲によって抜苦与楽を実現する社会ではなく、多くの人達が少しずつ力を出し合い、みんなで支え合う社会になれば良いのではと思えるのです。2年前の新型コロナで入院患者が溢れていた時、それに立ち向かう医療現場の緊迫した状況が重なります。不眠不休で患者の救命や感染防止にあたった医療スタッフの自己犠牲の姿を思い出し、あの時私たちは猿や狐と同じだったのでは、あるいはもっと傍観者ではなかったかと感じるのは私だけではないと思います。

今、人類はアルテミス計画で月面への再着陸を目指しています。月に兎はいないかもしれませんが、「月のうさぎ」に込められた心を大切にすることを一年の計にしたいと思います。





## 別子山の人たちが望むことは「つながり」



「傾聴ボランティア クローバー」顧問 齊藤 ミヤ

小春日和のような天候に恵まれ、別子山を目指しバスに乗り込んだ。目的は猪鍋を御相伴に預かるためである。前回「傾聴とナラティブ」講座でお話に行った際に、約束が成立し、本日決行となった。一時間余りの道中、美しい紅葉の木々を眺めながらさわやかな気持になった。

到着すると別子山の3名の皆さんが笑顔で迎えて下さり、ふるさと館に案内された。早速お茶を頂き、何と手作りの羊羹までお目見えし、おもてなしの気持が充分伝わってきた。しばらくするとお待ち兼ねの猪汁が大きなどんぶりによそわれ運ばれてきた。それが又何ともいえぬ味で猪の肉が柔らかく、白菜、大根、人参の野菜に程よく味がしみこみ、出汁の味も甘くもからくもなく丁度よい加減で、皆「美味しい」の連発で身も心も温もった。

食後に、私は改めて皆さんの熱い歓迎ぶりに、心から感謝の気持を述べさせてもらった。その後、美味しい料理に舌鼓を打った参加者一人一人に感想を述べてもらおうと、「心のこもったおもてなしに感謝の気持です」ということばが全員同じで、お礼の気持も充分伝わったような気がした。

山の生活は珍しい話ばかりなので参加者も興味津々で、色々な質問が飛び交った。別子の方々からは「新居浜と合併して二十年になるが、なかなか新居浜の人とのつながりが薄いので、今回つながりができ嬉しい」と言っていた。帰りのバスがお迎えに来たので、名残り惜しくて仕方なかったが別れを告げた。参加者も美味しい料理で腹を満たし、素晴らしい交流ができたことに満足し切っていた笑顔を見て私も心から嬉しく思った。

このような楽しい交流の場が実現したのは、傾聴から始まり、人と人の出逢いがあり、お互い心と心が通じ合って自然にこのような関係性につながってきたものだと思う。これからも、このご縁を大切に、生涯学習を通じて誰でもいつでも学べる社会の実現を目指し、地域の活性化につなげていくことが大切なのだろう。

出逢いは人生の何ものにも代えがたい、貴重な財産である。



## 「私の生涯学習」

まなびすと

尾崎 元宣

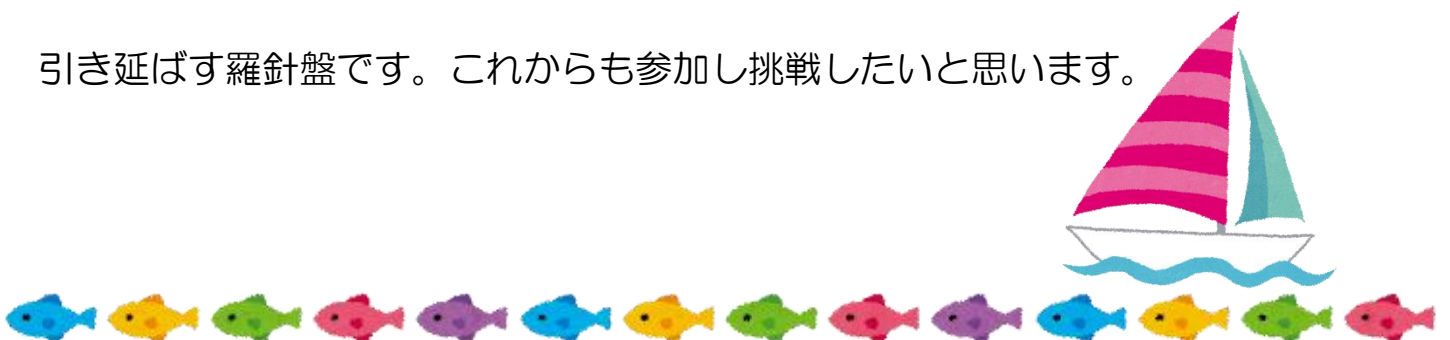


60年前23歳で単独無寄港太平洋横断を達成した堀江健一氏は、今年84歳で再度挑戦し前回の記録を25日も短縮しました。これは深い経験や技術の向上だけでなく、それにも増して、高齢になっても楽しみを持ち、謙虚に冒険に挑戦する心によるものだといえます。

思うに私たちも年を重ね健康寿命（男72歳、女75歳）の壁に挑む航海をしているように思えます。困難は突然起きます。私も65歳の時突然、腰の激痛で歩くことも、考えることも、ましてや新しいことに挑戦する気力も失い、改めて健康寿命の大切さを認識しました。

生涯学習大学では私たちが正しく安全に楽しく航海出来るよう、いろいろな分野の知識や活動を提供してくれています。授業に参加すると経験豊かな人やその道のエキスパートの話や意見を聞く貴重な体験ができ、多様な生き方、考え方に感動します。

堀江氏のように新しいことに挑戦し冒険する心が若さの秘訣のように思います。生涯学習大学の講座は、知的挑戦を促し、心の冒険を誘います。即ち、健康寿命を引き延ばす羅針盤です。これからも参加し挑戦したいと思います。



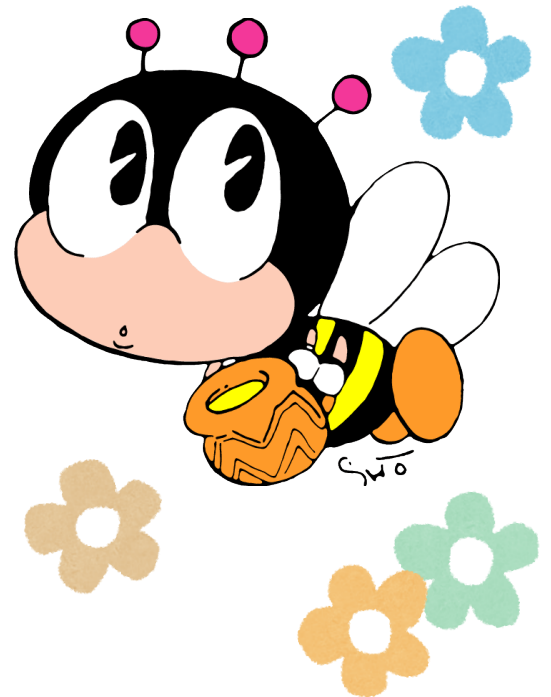


日	曜	講座名	回	テーマ	時間	場所
1	水	◎新・雑談しま専科	9	雑談パート⑤	9:30	生涯学習センター第1研修室
2	木	野鳥観察 初級	4	池田池公園探鳥会	9:00	現地
8	水	◎懐かしの心の唄講座	7	童謡、唱歌、ラジオ歌謡な…	10:00	文化センター別館中ホール
		◎人生百年医学講座	7	循環器疾患について	14:00	文化センター別館中ホール

※◎がついている講座は聴講可能講座です。

生涯学習のマスコット、

「マナビィ」をご存じですか？



「仮面ライダー」などの作者である漫画家の石ノ森章太郎先生のデザインで、平成元年に千葉市の幕張メッセなどで開かれた第1回全国生涯学習フェスティバル(まなびピア)でデビューしました。以来、生涯学習のマスコットとして、生涯学習の新しい風にのって、全国各地を飛びまわって、大活躍しています。

Q. どうして「マナビィ」と名づけられたの？

A. 生涯学習の「学び」とミツバチの「bee」とを合わせて「マナビィ」と名づけられました。

Q. マナビィの触角はなぜ3本あるの？

A. 「学」という漢字に角が3本あるように、学ぶことが好きなマナビィには触角が3本あります。

Q. マナビィが持っている壺の中身は何が入っているの？

A. マナビィが持っている壺に入っているものは、聖書に出てくる「マナ」という食べ物です。

コエンドロ(コリアンダー)の実で、その味は蜜を入れたお菓子のようであったとあります。昔、イスラエルの民がエジプトを脱出して、荒野を旅していたときに、天から授かり、それから40年もの間、この「マナ」だけを食べて生き延びたと言われています。石ノ森先生は、「学び」は人々が生きていくうえで欠かせないものであるというメッセージを、マナビィに託したのかもしれませんが。